

トラブルと自分づくりに関する一考察

池田 三津子

1. はじめに

石川県の幼稚園・保育園・小学校の連携事業の一貫として行われた、金沢市立菊川町小学校での「幼稚園・保育園・小学校教職員懇談会」に出席する機会を得た。菊川町校区内の5つの幼稚園、保育園と1年生から3年生までの担任が集い、「集団生活の中で信頼感を育て、人とかかわる力を育てるために」と、いうテーマで最近の児童、幼児の姿が話し合われた。

その中で、小学校低学年の現状と問題点がいくつか事例として取り上げられた。例えば、「自分の痛みには敏感だが、他人の痛みには鈍感な子」「寛容な心の育ちが遅れている子」「こだわりの強い子」「自己中心的な子」「おとなしくていい子」等々である。それに対して、園側は、それらの児童の実態は、幼児教育の現場ではどのクラスにも日常的に見られる姿で、1クラス全てに当てはまる事例でもあるといった捉えであった。ただ、その中で「何だか小学生になってパワーアップしているように感じて怖い」という幼稚園側の声も聞かれた。恐らく、そのパワーアップが学級経営はもとより、授業の成立に影響していることは否めない。

幼児教育の眼差しは、個々の育ちはバラバラで差があるというスタート、そして、バラバラだけれど一緒も楽しいというゴールである。目標は個々の育ちにに応じてバラバラであるのに対し、小学校は、到達度目標が明確に記されている。それを授業を通して達成させなければいけないと言う命題を担っている。到達度目標があるのに「〇〇が望ましい」という程度では学習者としての自立は促がせない。実は、一斉で学ぶというスタイルによって、個々の知的集積がバラバラにならない努力を学校は明治以来続けているのである。その学習スタイルも近年、総合学習絡みでさまざまに変化してきているが、大概は一斉スタイルが有効的に行われている。それ故、その授業が一人の児童やその子に周道的に参加してしまう児童らのために成立が危ぶまれるとしたら、学校そのものの意義を問われる大問題なのである。

そこで、本園がこれまでに研究の中で明らかにしてきた、「トラブルを通して自分づくりをする」というプロセスを小学校5年生A男の事例を取り上げ、検証したい。そのことによって、一人の子が育つというプロセスは、児童期においても同じであり、支援の方法もより具現化できると考えている。重ねて、現在、幼児教育に携わる者として、過去の小学校教諭時代の事例を考察することによって、育ちのつながりや児童理解への一考察となるよう願っている。

2. 事例について

事例1 「みんなB子ばかり庇っとるがいね」 A男 5年生の5月の姿から

事例2 「本当に、ご相談しようと思っていたのです」 A男の母 7月の個別懇談から

A男のプロフィール

成績優秀、スポーツ万能である。少年野球のクラブに所属し、野球関係で培った友達も多い。両親共に働いているので、保育園時代から祖母の家で過ごすことも多かったが、高学年になってからは、家を出るのが一番遅いA男が戸締まりして、登校することも多くなった。

低学年の頃、私がA男を見かけるのはボールをもって廊下に立って、何事か反省させられていたり、担任から何か諭されていたりする姿であった。姉を過去に担任し、その弟ということもあり記憶に残っている。更に、中学年の頃は新任教諭が担任という事もあり、

クラスの雰囲気を左右する立場を満喫していた。

A男を取り巻く学年集団はすこぶる評判が良かったが、クラス替えをした4、5月はそのクラスにもいざこざがあり、評判通りの良い学年という印象は無かったように記憶している。

事例1 「なんでB子ばかり庇うげんて」

5年生の5月 給食時間

給食当番の指示に従い、それぞれにトレイを片手に牛乳、パン、おかずを次々と当番から受け取る。この日は、シチューを最後に受け取る段取りになっていた。私は必死でシチューを盛っているB子の近くで、丸付けをしていた。給食時間は配膳台の周りは言うに及ばずクラスの雰囲気が和む楽しい場である。そんな場を一掃するかのようにA男の怒鳴り声が響いた。

A男 「何や、わざと零したやろう。謝れ」

B子 「わざとやないよ。ごめん。手がすべったんやて」

A男 「そんなことない。どうしてくれるんだって。謝れ！」

B子 「ごめん。本当にわざとしたんやないから、ごめんなさい」

床には零れたシチューが散乱し、A男の足や半ズボンにシチューが付いている。周りの女子らは、すぐに床を拭きだし「そんなに怒らんかていいがいね」と、口々に言い合っている。私は、女子らの動きに合わせて、A男の足や半ズボンに付いたシチューを取るのに必死になった。その間もA男はB子に対して刺々しい口調で、B子のミスで自分が被害を被ったことを力説していた。B子は当番の仕事が続けられなくなり泣き出した。女子の数人がB子の味方をし出した。

N子 「そんなに怒らんかていいがいね。ちゃんとごめんって謝ってるがいね」

D子 「そうや、あんたって何でいつもそんな言い方するが、別に誰だって失敗するがいね。謝っとるのに」

Y子 「シチュー零したからって、そんなにB子ちゃん攻めるなんて可哀相やがね」

A男 「寄って集って、俺が悪いんじゃない。B子が悪いんや。許さん」

A男は声を荒立て、女子らに「謝って済むか」と反論している。その間配膳は滞り、みんな固唾を飲む思いだった。私は、興奮しているA男の両手を取り、向き合った。

教師 「どうして、許してあげようと思わないの。ちゃんとB子ちゃんは謝っているじゃない。」

A男 「みんなB子の味方して、誰も僕のこと庇ってくれんがいね」と、泣き出した。

教師 「そんなことないでしょう。先生、ちゃんとあなたの足やズボンのシチュー拭いてあげたじゃない」

A男 「そんなことじゃない。何でB子ばかり庇うげんて」

教師 「それは、余りにも攻撃的なものの言い方をあなたがするからでしょう。もう少し冷静になったらどうなの？」

と、私も必死だった。

A男 「僕を悪者みたいにN子ら言うがいね」

と、A男もなかなか引かない。その時、T男とY男が「なあ、Aさんって」とA男を抱えるようにして連れ去った。その後、3人はどのような話をしたのか確認しなかったが、A男は「いただきます」の挨拶時には、自分の席に着いていた。

一学期の個別懇談で、A男の母親から5年生に進級してからのA男の家庭での姿を聞かされた。「本当に、ご相談しようと思っていたのですが、先生のこともしっかり分かっていましたから、暫く黙って待つことにしたのです。そしたら、6月頃から、落ち着いて来ましたので、安心した次第です。いろいろとご迷惑を掛けていたのではないのでしょうか」と、切り出された。A男はどうも、4、5月は、家でもイライラしていたようであった。親としてこれまで見受けられなかったA男の姿に戸惑いながら、どうしたものかと思案に暮れていたことがうかがえた。学校で何かあるらしいことは予測できたが、担任に任せて待つことにしたらしい。そこで、事例1に纏わることや授業中に友達の意見を野次ったり、採点が厳しく（漢字テストなど係りが厳しくて、止めや払いがしっかりしていないと減点などしていたので、A男は満点が取れなかった）4年生の時のようにいつも満点を取れなかったりする状況を伝えた。進級による価値観の揺れを母親が気に掛けながら、見守ってくれたことに感謝した。

3. トラブルについて

事例1「何でB子ばかり庇うげんて」のトラブルを、本園がさまざまな事例を検証する中で見出した4つの視点を元に検証することにする。

1. 周りの環境、状況、雰囲気について

給食時間というホッと一息つける状況の場にあって、A男の一方的にB子を攻める声に、クラスの和やかな雰囲気が一掃された。B子にとっては当番活動の大切な場が、自分のしたことによって当番の責務を果たせない状況下になってしまっている。

2. 当事者の抱える背景について

A男は学業は言うに及ばず運動技能にも優れ、総合力ではクラスのトップといっても過言ではなかった。だが、授業中に友達が間違った発言をすると、「そんなのも解らないのか」といったことを何気なく呟いたり、テスト中に大きな声で「先生、先生ちょっと来て」と教師を呼んだり思いのまま生活していた児童とも言えた。そんなA男の姿は女子らには「何でもできるからって言っても我が儘で、自分勝手やね」と映っていたようである。

加えて、5年生に進級してからは、授業中の暴言は悉く注意され、「テスト中は静かにしなさい」と言われ、且つ、テストをすればこれまでのように満点が取れず（社会科や理科でも習った漢字を書かない場合は減点していた）いたたまれない状況だった。4年生の時との違いに、どう向き合って良いのか暗中模索する日々だったと思える。それは、事例2の母親の話からもうかがえる。

3. 第三者のかかわりについて

B子には、弱さを抱える第三者としてN子やD子やY子がA男に批判的にB子に味方するというかきり方をしている。一方、A男にはまず、教師がシチュエで汚れた足やズボンを拭く行為でかかわり、最後にT男やY男が教師の困っている立場やA男の思いに添うかたちで状況を理解し判断しようとする第三者としてかかわっている。

「なあ、Aさんって」と、A男を抱え込むようにしてその場から連れ出したT男やY男にとっては、A男の言動は許容範囲だったのである。それは、少年野球のメンバーとして築いてきた絆の強さとも言える。

4. 教師のかかわりについて

①トラブルの質の見極め

A男がどうしてこれ程まで、他者攻撃するのかその当時は理解できず、5年生にもなって相

手が謝っているんなら許してあげればいいのにと、A男の寛容さの無さにただただ情けなくなった思いは鮮明に残っている。今なら「熱く無かった？ 大丈夫だった？」と、A男に声を掛けるだろう。

このトラブルは、B子がつい手が滑って、A男のシチューをA男の持っているお盆の上にきちんと置けずに落としてしまい、そのシチューが床に散乱し、飛び散ってA男の足やズボンに付着したことが原因となって起きたトラブルである。シチューを落とした瞬間、B子もA男も互いに「しまった」と思ったはずなのに、教師はその思いを受け止めずに、A男の言動に偏ったかわりをしている。何が原因かつかめればそんなに右往左往しなくてよいのに、実際その場をしっかりと見極めていないために対処療法的なかわりに陥りやすい。そのことによって、トラブルの質が変わっていく危険性もある。何故、B子を許さないのか、その時は気付かなかったが、A男は、明るくて友達に慕われているB子に、クラスに今一つ馴染めずに四苦八苦している自分自身の対局を見ていたのではないだろうか。

②個の育ちと個への願い

A男の姉を過去に担任していたことから、A男の家族については自分なりに理解していた。この事例のA男の姿は、私を「両親があれだけ一生懸命に働いているのに……」「5年生にもなって友達のミスを許す心が育っていないなんて……」などと、残念で情け無い思いに至らしめた。4月からのA男の言動から、「友達に寛容で且つ誰にも対等であるように」と願っていた。また、「自分の力を誇示することなく、持てる力を友達と共存する中で出せるように」とも願っていた。教師の願いが高ければ高いほど、A男には厳しい教師に映っていたと思われる。後に、自分のことを庇ってほしかったA男の思いに気付くようになってからは、「5年生にもなって」などと思わずに、A男の言動を受け入れるよう努力した。

③トラブルにかかわる第三者やクラス全員の場での対応

事例1ではB子の味方をしているN子、D子、Y子がトラブルを起こした当事者同士にかかわっている。一方、A男にはT男やY男がかかわっている。しかしながら、教師は互いにかわりあった第三者としての評価を下してはいない。B子にかかわったN子らの言動は至極当然のように考えていたし、彼女らと同じくA男の激しい口調に寛容さを求めている。更に、T男やY男の行為には内心大助かりで、これで一件落着の思いを抱いていた。

このトラブルは給食時間というクラス全員の場で起きている。それぞれにさまざまな思いを抱いていたであろうが、何の対応もしていない。加えて、トラブルにかかわったメンバーに対しても、教師の思いは伝えないままであった。

学年が進行するに連れ、第三者やクラス全員を巻き込まないで、当事者同士をしっかりと向き合わせることも効果的なこともある。どうかかわることが、個にとってベストか或いは集団の質を高めるのか、その見極めは教師の力量にかかっている。

4. 自分づくりについて

中国歴史小説の第一人者である作家の宮城谷昌光は「青はこれを藍より取りて、しかも藍より青し」という荀子の名言を荀子の思想を踏まえて、新たな解釈をしていて興味深い。従来「出藍の誉れ」の故事として「藍から取った青色がもとの藍より青いように、優れた弟子は師よりも勝る」という意味につかわれている。だが、その解釈を更に深めて、「青は新しい自分で、藍は古い自分、或いは青は洗練された自分で、藍は素朴な自分と言ってもよい」ということなのである。

宮城谷昌光の解釈は、本園が平成7年度から3年間かけて取り組んだ「自分づくり」のプロセスを端的に表現している。それは、本園が解明してきた古い自分と新しい自分の解釈が同じ意味をもっているからである。ただ、付け加えるならば「新しい自分」は、「他者受容の中で

行きつ戻りつしながら変容する自分」を意味していることと言える。そこで、5年生A男の姿を自分づくりという視点で考察してみたい。

①新たな環境を通して

子どもにとって新しいことは魅力である。好奇心を働かせ教師や友達にかかわり新たな世界を創ろうとする。教師にとっても、新たな出会いは、何年教師をしようと心の高鳴りをおぼえるものである。ましてや子ども達はいかほどであろうか。

その当時のM校は3年生、5年生がクラス替え学年であった。A男は3年4年と新任教諭とともにギャングエイジを満喫するように生活し、5年生に進級した。3学級編成だったのでA男にとっては、3分の2が新しいメンバーとなる。A男を批判したN子、D子、Y子はもちろんB子も、クラス替えで出会った新たなメンバーである。彼女達にとっては、A男のB子に対する言葉は乱暴で聞き捨てならぬものであり、また、これまでの経験の範疇にない許せない男の子だったのである。また、A男に寄り添ってくれたT男とY男も野球クラブでは関係があっても、クラスが一緒になったのは始めてである。

このトラブルを振り返ってみると、A男にかかわっていた第三者は、皆、A男にとって5年生で初めて一緒になったメンバーだということである。そのことから、新たな環境や出会いは、それぞれにとってさまざまな問題行動や心の揺らぎを生じる場であるということが見えてくる。前評判の良かったA男の所属する学年集団も、この時期は新たな環境への適合にそれぞれがいざこざを繰り返し、新しい世界創りをしていたのである。

②新たな価値に向けて

事例2の「本当に、ご相談しようと思っていたのです」から読み取れるように、4、5月A男は、家庭で苛ついていた。私自身もA男の苛立ちは手に取るように感じていたが、学級づくりの大切な時期でもあり、その時期は徹頭徹尾教師サイドの方針を貫いていた。例えば、「授業中の暴言に対する叱責」「減点法による厳しい丸付け」「班ノートや宿題のチェック」「朝のコーラスの徹底」等々、A男がこれまで通りに振る舞えば振る舞うほど規制を受ける日々だったのである。A男は、新しい担任との出会いによって、これまでの価値体系から新たな価値体系へ、自分自身を移行させねばならない努力を強いられていた。そんな中で事例1のトラブルは起きたのである。A男の価値観の揺らぎは肌で感じながらも、私は集団づくりを優先し、集団の力を信じてその集団にA男を巻き込む方針を変えなかった。

そんな強引な教師とは裏腹に、A男は新たな価値とどう向き合えばよいのか、在るがままの自分を出しながら、必死に自分づくりをしていたのである。A男の「なんでB子ばかり庇うげんて」には、「僕だって、一生懸命自分づくり頑張っているのに、誰も認めてくれないじゃないか」というメッセージが込められていたのではないだろうか。

5. おわりに

本園が培ってきた研究の視点で5年生の事例を検証し、考察してみた。それは、学校現場でも児童一人一人の育ちやトラブルを捉える眼差しが大切だと明言したいからである。そんなこと当然の理と思っている教師は多い。だが、果たしてそう言い切れるのであろうか。私自身、「〇年〇組とA男」という捉えで「集団と個」の関係を見ていた。同じ状況でも幼児教育の現場は「A男と〇年〇組」という捉えをする。前者は「〇年〇組にA男がいます」となり、後者は「A男のいる〇年〇組です」となる。どちらにも意義付けはできるが、個々の「自分づくり」を読み取るときには、「A男のいる〇年〇組」というスタンスで一人一人に寄り添うことが不可欠ではないだろうか。それは、教師一人一人が、今を生きている子ども達一人一人の「新しい自分づくり」を、集団との関係性の中で育む使命を担っているからである。